

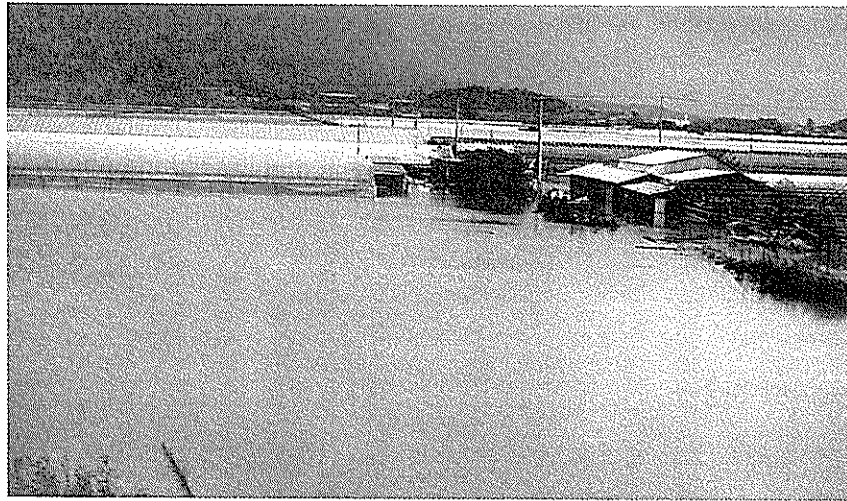
集中豪雨で施設園芸壊滅

和食川河口の導流堤完成に伴い、長く苦しめられた湿田は解消されたが、平成元（1989）年8月30日、県東部は記録的な集中豪雨に見舞われ、芸西の基幹産業である施設園芸が壊滅的な打撃を受けた。

早朝から降り出した雨は芸西に集中。時間雨量は同日午前7時からが106ミリ、同8時からには114ミリと、高知地方気象台のアメダス観測史上1、2位となる、すさまじい豪雨を記録した。

当時、和食川の改修工事は進められていたが、村役場北側の和食川橋まで。県道216号も橋の北から右折して村道を経て県道に連結していた。豪雨によって起きた洪水は、谷内川両岸堤防を100メートルに渡って決壊させ、濁流が育苗の始まっていた園芸ハウスを押しつぶした。

村のまとめによるとハウス園芸を中心に、被害は全村に及んでいる。被害総額は19億2、000万円（農村5、一般4・5、土木9億円など）に上っている。これは、昭和51年2月の集中豪雨（最大時間雨量52ミリ、総雨量179ミリ）、同年9月の17号台風による水害（最大時間雨量64ミリ、総雨量503ミリ）の被害を大きく上回っている。



平成元年の集中豪雨で水浸しになったビニールハウス群（和食）

なお、この大災害では県園芸連の呼びかけもあって、西は須崎市から東は奈半利町までの農協、農家、さらに高知通運関係者まで200人あまりがハウスの後片付けに駆けつけてくれた。労をいとわず、折れ曲がったパイプの切断、骨組みの膨大な木材の搬出など、当然家族だけでは成し得ないことを手伝っていただいたことも付け加えておきたい。

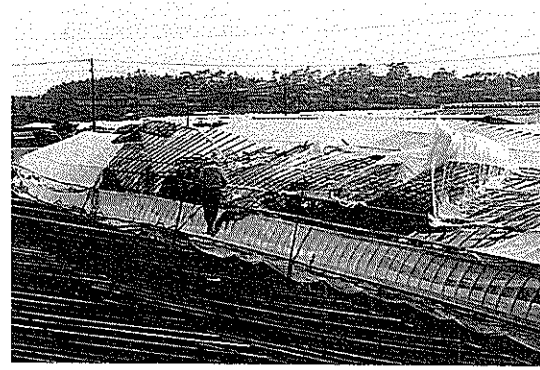
村を襲った大竜巻

平成6（1994）年10月12日午前10時半ごろ、村始まって以来の大竜巻が襲った。

竜巻は琴ヶ浜の海岸地帯から平野部中央のやや西方、国道55号を北東へ。幅40〜50メートルに及び、ハウス園芸に大きな被害を与えた。バリバリという大きな音とともに、竜巻の進路に位置したハウスのビニールが破られ、植え付け間もない基幹作物のナス、ピーマンはほぼ全滅する。

ハウス園芸の被害はピーマン6戸、ナス3戸、花き1戸でビニール破損0・9、施設被害0・3、農作物被害0・2ヘクタール。午後から村内全ハウス園芸農家を動員して、施設の応急修理や後片付けに当たり、業者も駆けつけて建て替えに近い修理を行った。JAの世話で苗の植え替えも滞りなく完了、被害を最小限に食い止めることができた。

なお、記憶に残る竜巻は昭和32年の12月にも発生。和食の浜



平成6年の大竜巻で被害を受けたビニールハウス

地区では民家1戸が全壊、近くの家から巻き上げられたトタンの雨どいが松に巻き付いた様は、さながら竜が天に上っていくように映ったという。地元の老人は、「上の沖（南西）から真つ赤な火の玉が飛んできた。竜巻の通り道になったあたりでは地引き網の船が全部沖を向いちよった」と、恐怖体験を語っている。

若者定住住宅を建築

Uターン希望の若者らの定住を推進しようと建設していた賃貸公営住宅が、平成7（1995）年3月末に完成。全戸3LDKのゆったりした間取りで、村内外からの入居を受け入れることになった。

この住宅は「憩ヶ丘コーポ」と名付けられ、鉄筋コンクリート3階建て2棟で、各階4戸の計24戸。全戸南向きになっており、1戸当たり面積は約76平方メートル。若い世代を意識して、外壁は淡いピンク色に。

若者定住住宅





平成16年の台風23号で大きな被害を受けたハウス園芸。国道55号北側の9ヘクタールが水没した

台風23号襲来で大被害

平成16(2004)年、本県は夏から秋にかけて記録的な台風上陸に見舞われた。上陸した台風は4、6、10、21、23号と実に5個を数え、上陸回数最多記録をさらに塗り替えることとなった。

相次ぐ台風襲来は村にも大きな被害を与えた。特に10月20日の23号では、県東部でも室戸市で防潮堤が決壊、2人が死亡している。村の被害も深刻で、全農家の約3分の1(125戸)が被災する異常事態となった。時間雨量86ミリという猛烈な雨によって多くのビニールハウスが冠水。国道55号北側ではハウス約9ヘクタールが水に浸かり、水深1メートル以上になったハウスも多く、農家に追い討ちをかける結果となった。

台風直後には冠水した場所の消毒作業に入ったが、3、4日後には疫病が発生。基幹作物のピーマン、ナス、花き類は次々に腐って、堆肥センターに廃棄された苗木が山積みとなり、「全滅」に近い状況となった。さらに、農作物の出荷がこれからというタイミングに加え、夏場に値下がりした野菜価格も少しずつ上がり始めた、この時期の被災は最悪の状況を呈した。

一方、浄化センター前の特設ゴミ集積所には冠水した農具、古ビニールやパイプ、粗大ゴミが次々に運ばれてゴミの山と化した。

和食地区には国道55号とハウス園芸地帯との間に排水路があり、和食川河口付近で合流している。出水時は合流点近くに設置された排水ポンプ3基が、毎秒計5・3トンを直接海に排出する。また合流点には、和食川からの逆流を防ぐ樋門が設置されている。

浸水被害の責任をめぐって11月5日、被災農家と村側の協議が行われた。

協議には、農家ら約40人と、山崎恒夫村長や和食川を管理する県、排水ポンプの設計業者が出席。業者がポンプの能力と当時の降雨量(最大の1時間雨量は86ミリ)から、「ポンプの能力を超える雨が降った。樋門を閉めても閉めなくても水位は確実に上がった」と説

明。村も、「ポンプの排水と合わせ、和食川に流した方が水はけが早いと考えた」と答弁した。

これに対し、農家からは「樋門を閉めて浸水したのなら納得するが、閉めてもいけない」「ものすごい量の水が逆流してきた。何のための樋門か」などと、村の管理責任を問題視する声が上がった。

山崎村長は「和食川からの逆流が始まれば樋門を閉めるのが当然」と閉めるタイミングが遅れたとの認識を示したが、あくまで「天災」との考えを崩さず、協議はかみ合わないまま終了した。

この後、山崎村長は村議会の議員協議会（非公開）に臨み、被災農家への支援策を協議。村内の全被災農家を対象に無利子融資を行うほか、1戸当たり10万円の見舞金を贈ることを決め、議会側も承認した。